

藍中広場に、スポーツを楽しむ人がやってきます。楽しそうな声が響きます。

でも、ある日ゴミが目立ち始めました。藍中生と藍中卒業生が、自分が出したゴミではないけれど、集めて掃除していました。ありがとう。

微力(わずかな力)でも、人のためにやっていることは、自分のためでもある。何もしないなら、周りも変わらない。わずかな力は大きな力。人の優しさにふれて、また美しい世界が見えてくる。君が変わればクラスも変わる。学年が変わる。藍中が変わる。美しくなる。わずかな力でも……。その力を合わせて、あたたかい絆をつくってほしい。

「無力と微力の二人の天使」

その街に二人の天使が舞い降りた。その街に降りてから天使は十月十日眠り続けた。目を覚ますと、天使は自分が天使であることを忘れていた。

天使が舞い降りたその街はゴミだらけの街だった。あまりにもものゴミの多さや、人の心に天使は悲しくなった。

一人の天使は自分を無力と呼び始めた。もう一人の天使は自分を微力と呼び始めた。

無力の天使の口癖は、「私だけがゴミをひろってもしようがない。」

微力の天使の口癖は「私は私が出来る事をやってみる。」

無力の天使はゴミだらけの街を見て絶望を感じて、街から目をそらして、毎日空を眺めていた。

微力の天使は、一度は絶望を感じたものの一日一個ゴミを拾い始めた。

一年後、無力の天使は空の素晴らしさをいっぱい知った。朝日の美しさ、夕日の美しさ、虹が架かった時のすばらしさ。

一年後、微力の天使は微笑んだ。街から 365 個のゴミが無くなった。

それから一年、さらに無力の天使は空のすばらしさをいっぱい知った。空や雲の変化をおもしろいなと見つめていた。

その頃、微力の天使は毎日「ありがとう。」と言いながら毎日を過ごしていた。それは微力の仲間がいっぱい増えたから。

「一緒に拾うよ、わたしの力も微力だけど、一緒にゴミを拾うよ。」10 人の微力達と一緒に拾った。1 年たったら 3650 個のゴミが無くなった。

それから一年、無力の天使は空の美しさだけでなく、街の美しさにも気づき始めた。街

がピカピカになっていた。なんと街では 1000 人がゴミを拾っていて、一年間で 365000 個のゴミが無くなって、大変の意味が変わっていた。

微力の天使は言いました。「初めはゴミを拾うのは大変でした。」でも今は拾うゴミを見つけるのが大変です。」この町はある日から、ゴミを拾う人も増えたけど、ゴミを捨てない人も増えたのです。あの人が拾っているゴミは私が捨てたゴミ。私はゴミを拾うことはできないけれど、ゴミを捨てるのをやめよう。

微力の天使は誰も否定しませんでした。微力の天使は自分が出来る事をやっただけなのです。

無力の天使の心に変化が生まれました。無力の天使の心から絶望が消えていったのです。そして、無力の天使も「ありがとう。」を言いました。ゴミを拾ってくれてありがとう。

お礼に無力の天使は微力の天使に空の美しさを教えてあげました。次の日、二人の天使はゴミを拾いました。正式には、ゴミを探すために歩きました。しかしゴミは見つかりませんでした。

夕方になると、空がピンク色になりました。すてきな空を見ながら、二人の天使は幸せを感じました。ぴかぴかの街と、美しい空を見ながら、二人の天使は二つのことを学びました。

自分を無力と言う天使は言いました。「あんたが動いてくれたから、この街は天国になったんだ。天国は動いたら作れるんだね。」

自分を微力という天使も言いました。「私は下ばかり見ていたから空の美しさを知らなかった。でもあなたが空の美しさを教えてくれたから気づけたことがあるよ。それはすでにここは天国だということ。」

今はすでに天国。

そして、動けばさらに天国が増える。二人の天使は少しだけ、自分の背中に翼があることに気づけました。

「あなたは天使だよ。」

「あなたこそ天使だよ。」

「みんな天使だね。」



絵 岡本 尚子